

BOOK REVIEW

茶の湯の歴史

熊倉 功夫 著 朝日選書

外国人の見た「ジャパニーズ・ガーデン」のシンボルがどこにあるかといえば、「The Garden」に見るように、Japanese Lantern=灯籠であることは、誰の目にも確かなところだ。しかし、なぜまた灯籠なのでしょう。もともと神社や寺の献燈のための道具にすぎなかった灯籠がほとんど庭の主演となっているところに、茶が日本の庭に与えた力の大きさがあらわれています。

茶、または茶道は茶庭という一つのスタイルをつくりだし、また審美的な基準として利用されながら、それ自身が庭の側から省みられることがあまりありません。それは茶が日本的なものとして、日常の中に埋没してしまっているからだ、といえるでしょう。ところが、茶と茶庭の歴史を洗いだしてみると、それは中国の文物への崇拜と反発、その過程での西洋、特にキリスト教文化との接触による刺激のもとに、茶の湯の美学の一部として形成されていったことがよくわかります。また、下剋上という政治的かつ文化的な社会状況が、茶の湯をして「茶道」として大成するという選択をしたのは、なかば必然的なことであつたことが見えてきます。

千利休がなぜ切腹をしなければならなかったのかは永遠の謎であり、これからも諸説が語られるに違いありません。しかし、千利休の茶の湯とは、室町時代に生まれた茶法の価値の転倒であるという意味で文化における下剋上の体現だったのであり、「秀吉は下剋上の文化を圧殺すべく、利休を葬った」ということは、少なくとも結果としては当然の帰結だったように思えます。庭に灯籠を持ち込んだ利休の新しさは、利休の死とともに意味を失い、単なる慣習に墮したのかもしれない。

ところで、イギリスにおける自然式庭園と整形式庭園の対立を、自然に対する「作為とは何か」という視点の違い、と見ると、日本でも同様の問題が利休以後に発生していることに思いあたります。利休をはじめとする堺の町衆の繁栄を、イギリスで紅茶の文化を育んだジェントリー層の興隆と重ねあわせてみれば、茶庭のもっていた政治的なメッセージは、より鮮明になってくることでしょう。茶はまた、歴史を近代へと転換することに一役かつた不思議な植物でもあるのです。

さて、植物としての茶の起源を訪ねてみると、茶と庭との、もうひとつの関わりがみえてきます。東西の文明をひきよせたこの植物の魔力は、昆明の南 800 キロの山中にあるという「茶樹王」の生命力に現れています。栽培植物でありながら樹齢 800 年という時の重さには、「永遠」を夢見る我々の幻想の主たるにふさわしい幻想性が宿っています。

茶の栽培はここに始まり、雲南から安徽へと広がって、やがて東は日本を限りに、西はイギリスへと広がってゆくのです。栄西による茶種の将来や、ロバート・フォーチュンのインドへの茶樹の輸入が偉業として語りつがれているのも、茶のつくりあげる場が自らの起源の神話を要求しているからに違いありません。

茶と庭、その関わりは、異境にあこがれ、永遠を希求する我々にとって、永遠のテーマであり続けることでしょう。